〔連載〕中国を歩く、世界をみる

世界の「斜都」・日本編

第4回

丸川知雄

前回は私が知る限りでの世界の傾いた都市について書いたが、今回は日本の「斜都」について書こう。

日本の斜都と言えばまず思い浮かぶのは横浜市である。歌川広重の東海道五十三次の絵に見る横浜（神奈川）は海沿いの傾斜した土地にへばりつくように並んだ宿場町であった。幕末以来の相次ぐ埋立と造成によって平地の部分も拡大してきたとはいえ、関東大震災で生じた瓦礫を埋め立てて作られた山下公園から南へ数百メートルも行けばたちまち山手にさしかかる。この海沿いの丘陵が往時の横浜の姿だったのだろう。そしてこの連載の前々回でも指摘したように欧米人たちは傾斜地に住むのを好むようで、尾根道の山手本通りをまたぐ斜面に外国人居留地が作られた。

前回、香港では金持ちになればなるほど標高がより高いところへ移り住む傾向があると述べたが、住む場所の標高の高低が階級の高低に対応する状況は日本でも一部にあるのかもしれない。そのことを横浜を舞台に描いたのが黒澤明監督による映画『天国と地獄』である。横浜駅近くの高台である浅間台に住む大企業重役の運転手の子供が重役の子供と間違われて誘拐される事件を描いた映画だが、高台にある瀟洒で涼しげな住居を、低地の暑苦しい木賃アパートに住む犯人が見上げるなかで、その住居の住人に対する階級的憎悪を抱いたことが犯行の動機だったとされている。都市のなかでも標高の高い傾いた場所が高級住宅街だとされる傾向が果たして日本でどれほど一般的なのか私には判断がつかないが、「○○ヶ丘」や「○○台」という地名が住宅団地に好んでつけられる傾向は全国的に見られるので、日本でも丘陵や台地は住む場所としてよいイメージを持たれていることは間違いない。

傾きの激しさという点では、おそらく日本では他の追随を許さないのが長崎市である。浦上川と中島川という流れの急な二本の川がえぐりとった谷に沿って長崎市は発展してきたので、出島など埋立によって作られた平地を除けばほぼ市の全域が傾いている。谷底から市街地が実に二〇〇メートルもの高低差を伴って続いているそうである。江戸時代には出島に押し込められていた欧米人たちは、幕末になるとグラバー邸のある大浦やオランダ坂のある東山手など港を見下ろす丘の斜面に作られた外国人居留地に移り住むようになった。欧米人の傾斜地好みはここでもいかんなく発揮されたのである。

戦後長崎の人口増加にともない、住宅地は谷底から斜面を上へ上へと広がっていき、自動車も入ることのできない斜面の住宅地が形成されてしまった。自動車が入れないのは防災上の問題があるし、坂の町を上り下りするのは高齢者にはつらいので、長崎市では人を坂の上まで運んでくれる斜行エレベーターや二人乗りのリフトを整備している。グラバー邸など幕末から明治にかけて建てられた洋館を移築して集めたグラバー園も長崎湾を見下ろす傾斜地に作られていて、来園客のためにエスカレーターが常時稼働している。ただ、個人的にはこのエスカレーターは明治の外国人居留地の雰囲気を壊してしまっていて、やや興ざめである。

グラバー園から見おろした『斜都』長崎

長崎オランダ坂の洋館街を見上げる

急流の川によってえぐられた谷間に作られた斜都長崎の弱点は豪雨に弱いことである（高橋和雄『豪雨と斜面都市―一九八二長崎豪雨災害』古今書院、二〇〇九年）。一九八二年の豪雨による河川の氾濫や土砂崩れにより、長崎では二九九人もの死者・行方不明者を出した。この災害の経験を踏まえ、住みやすい斜都作りを目指して長崎市は一九八九年にサンフランシスコ、香港など世界一五カ国の斜面都市の代表者を招いて「国際斜面都市会議」を開催している。世界の斜都が結集した会議はこの一回だけで終わったようだが、日本国内では一九九一年に全国斜面都市連絡協議会が発足し、小樽、函館、横須賀、熱海、尾道、呉、下関、別府、長崎、佐世保、北九州、神戸の一二都市が加入しているという。この中で私が宿泊したことのある都市は六つしかないが、小樽や横須賀、神戸はなるほど斜都だと思う反面、何度も訪れた北九州は余り斜都のイメージはない。私が会議などで訪れた場所はだいたい埋立地だったのだろう。北九州市は、関門海峡を船が通行できるようにするためにたえず海底の土砂を浚渫し続ける必要があり、それをどこかに埋め立てることになるので、次第に平地が増えていく運命にあるのだという。

一方、神戸は斜都のイメージが強い。源平の戦いのなかで源義経がひよどり越を馬で駆け下りて平家の陣地の背後を突き、一ノ谷の戦いを勝利に導いたのもここ神戸市である。山がまっすぐ海に落ち込むところの、海沿いのわずかな平地と傾斜地を利用して都市が作られ、それが海沿いに果てしなく伸びた、というのが神戸という町の成り立ちのように思われる。幕末に神戸が開港されると、港を一望できる北野町の高台に外国人居留地が作られ、いまも「異人館街」として往事の姿をとどめている。その坂道を上り下りしながら、あらためて欧米人の傾斜地好きを思った。

神戸の傾斜地と言えば神戸大学も印象的である。会合などで時々お邪魔するが、JR東海道本線の六甲道駅からたちまち上り坂になり、山の斜面にキャンパスがひな壇のように何段にも積み重なっている。神戸大学から大阪湾を見下ろせば、眼前にポートアイランド、神戸港、神戸空港などが広がる。キャンパスにイノシシが出没するらしいし、毎日通勤・通学される方々にはいろいろと苦労もあるだろうけれど、たまに訪れる身にとっては、行くたびに広々とした風景を眺めて爽快な気分に浸れるキャンパスである。神戸大学を訪れた帰り道に、バスの待ち時間が長かったのでいっそ駅まで歩いていこうと大学から坂道を駆け下りていたら、

見知らぬ女性が運転するクルマが歩道際に止まり、「お急ぎでしたらどうぞ！」とドアを開けてくれた。「駅まで行くんですがよろしいですか？」と聞くと、「よく送迎していますので、構いませんよ」といって乗せてくれた。斜都ならではの人情と言えようか。

横浜と言えば、いしだあゆみの「ブルーライト・ヨコハマ」を思い出し、長崎、神戸と続くと、どうしても前川清の顔がちらついてしまう。統計的な裏付けはないが、斜都を取り上げた歌謡曲は多いように思うし、海外をみても、例えばブラジルでは斜都のサルヴァドールやリオを歌った歌は非常に多い。斜都は詩情をかき立て、歌になりやすいといえるのではないだろうか。

東京も実は斜都であることを私はもっぱらタモリが出演するNHK番組「ブラタモリ」で学んだ。「坂学会」という坂愛好者団体のウェブサイトによれば、東京二三区だけで名前のついた坂が実に八五七カ所もある（但し、そこには今では消滅してしまった坂も含まれている）。いうまでもなくその大半が京浜東北線より西側、つまりいわゆる山の手に存在する。私の研究室がある東京大学の本郷キャンパスは、駒込の方から続く台地の上に乗っており、キャンパスから東の上野公園の方角へ向かえば無縁坂、南のお茶の水方面へ向かえば見返り坂、西の後楽園の方へ向かえば菊坂、と三方向に下り坂がある。

斜都東京の魅力は、私見によれば、斜面が上がったり下がったりするところにある。私の出身地である札幌も傾斜していると言えなくもないのだが、川が山間部から平野に出るところに形

現代中国政治［第3版］
―グローバル・パワーの肖像―
毛里和子著　毛沢東から胡錦濤へと至る政治の巨大な変容を、長年の研究に基づき包括的に叙述、第一人者によるもっとも信頼の厚い解説書、大幅改訂による待望の最新版。　2940円

日本石油産業の競争力構築
橘川武郎著　産業の創始から今日までの初の本格的通史により、エネルギー安全保障の核心的課題を摑みだし、危機回避と産業競争力の再構築に向けた道筋を示す必読の成果。　5985円

鮎川義介と経済的国際主義
―満洲問題から戦後日米関係へ―
井口治夫著　日産自動車を創業し、日産財閥を率いて満洲の経済開発を一手に担った男の、経済的自由主義のヴィジョンに基づく日米開戦回避と戦後の再架橋に向けた苦闘を描く。6300円

アメリカ合衆国と中国人移民
―歴史のなかの「移民国家」アメリカ―
貴堂嘉之著　アジアからの眼差しで、人種や性や労働の問題が交錯する南北戦争後の〈アメリカ人〉の境界画定の動きを鋭く読み解き、アメリカ史像の核心をうつ力作。　5985円

アダム・スミス 法学講義
―1762～1763―
水田洋ほか訳　グラスゴー大学で行われたスミスの法学講義を手稿から再現。司法＝正義と統治の歴史を描き出し、自由で公正な社会を展望した壮大な文明史論。本邦初訳。　6930円

名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町名大内
TEL052(781)5353　FAX(781)0697
http://www.unp.or.jp

東京・田園調布の緩やかな坂の連なり

成された扇状地の上に街ができているので、斜面の方向が一方向である。自宅から自転車で高校に向かうときは緩やかな下りなので楽だが、帰りは上りになって少し大変と、いささか単調なのである。その点、東京は上がったり下がったり複雑である。しかもその複雑な地形の上に都市が造られたため、道がさまざまに湾曲し、意外な形状で街と街とをリンクしている。徒歩や自動車で移動すると、地下鉄やＪＲのネットワークでは気づかない意外な結びつきに驚く。いつもＪＲ山手線の田町駅で降りて向かっていた慶應義塾大学が、麻布十番に意外に近いとか、東京在住期間が二五年を超えている私でもまだ知らないことが多い。街路が碁盤の目のように作られ、常に自分の座標を意識させられる札幌のような街ではそういう意外な結びつきを経験することはない。

上がったり下がったりの東京には街を見下ろすような高台は存在しないので、高台に金持ちたちの邸宅が並ぶということもない。ただ、東京でも高級住宅街とされるところにはやはり美しい傾斜があるようだ。東京の高級住宅街といえば地方人の私は田園調布ぐらいしか思い浮かばないが、その田園調布は駅から半円のすり鉢状に街路がせり上がっている。その坂を上まで登っていくと、今度はかなり急な下り坂になり、そしてまた上り坂になる。この地形のうねりによって見晴らしがきく場所ができる。見晴らしが良いということは、住宅地の価値を高める大きなポイントであろう。

こう見ると日本にも魅力的な斜都が少なくないようである。斜都を求めてこれからも旅を続けたい、といえるほど旅行の機会はないが、せめてもう一回分書けるぐらい斜都の知識を広めたいものである。

（まるかわ・ともお＝東京大学社会科学研究所教授）